



2019年における世界の食料需給見通しについて

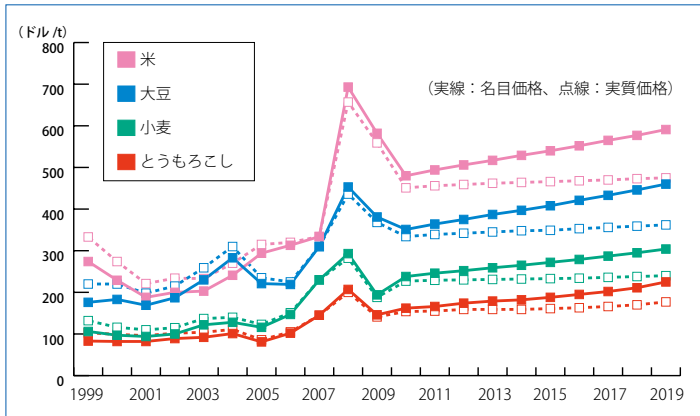
1 はじめに

農林水産政策研究所では、世界の食料需給に関するプロジェクト研究の一環として開発した「世界食料需給モデル」を用い、昨年度に引き続き、10年後（2019年）における世界の食料需給見通しに関する定量的な予測分析を行いました。

2 試算の前提

予測の試算の前提となる人口については、国連による世界人口予測に基づき、2019年の世界人口を76億人と推計し、経済成長については、世界銀行によるGDP及びIMFによる実質経済成長率に基づき推計しています。

また、耕種作物について現状の単収の伸びが継続し、作付面積の拡大についても特段の制約がないという前提で予測を行っています。さらに、バイオ燃料原料用の需要については、今後も



第1図 穀物及び大豆の国際価格の推移の予測

各国の現行の政策が継続することを前提としています。本予測結果は、これらの前提を基に、各国政策の変更がなく、今後も平年的

3 予測結果の概要

な気象状況が続いた場合の姿を示したものであり、「ベースライン予測」と言われるものです。

2008年の世界的な金融危機における経済成長の低迷は一時的なものであり、途上国の経済成長は今後も高い水準で推移すると見込まれています。これを踏まえると、まず、穀物（米、小麦、とうもろこし、その他穀物）及び大豆の消費量は、2007年から2019年までの12年間で5億トン増加し、26億トンに達する見込みとなっています。その増加要因を品目別に見ると、小麦及び米については、主に食用需要の伸びにより、とうもろこし及びその他の穀物では主に飼料用とバイオエタノール原料用需要の伸びにより、大豆については搾油用需要などの伸びにより、いずれも増加するものと見通しています。中でも、所得向上に

第1表 穀物及び大豆における試算結果一覧表

		(単位:百万t, ドル/t)				
		小麦	とうもろこし	米	その他穀物	大豆
2007年	生産量	629	764	433	276	224
	消費量	623	759	428	275	227
	食用等	517	191	428	128	211
	飼料用	106	487	-	147	17
	バイオエタノール原料用	-	81	-	-	-
期末在庫量	138	126	82	33	53	
2019年	生産量	757	966	519	334	291
	消費量	759	971	520	335	292
	食用等	629	215	520	153	271
	飼料用	130	617	-	182	21
	バイオエタノール原料用	-	139	-	-	-
期末在庫量	128	108	76	31	47	
増減率 (%)	生産量	20	26	20	21	30
	消費量	22	28	21	22	28
	食用等	22	13	21	20	28
	飼料用	23	27	-	24	24
	バイオエタノール原料用	-	71	-	-	-
期末在庫量	-7	-14	-7	-7	-10	

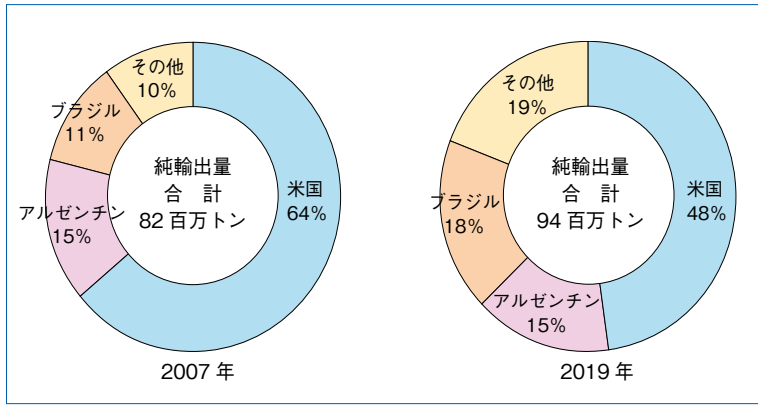
注:大豆の食用等については、搾油用の消費量も含む。

伴う肉類消費の増加から、飼料用の穀物消費量の伸びが26%と高くなっていますが、こうした穀物消費量の伸びに生産が追いつかず、期末在庫率は低下していく見込みです。このため、穀物

世界食料プロジェクト需給モデルチーム

※本分析は、以下のプロジェクトチームが行った。

- 古橋 元 (食料・環境領域主任研究官)
- 小泉 達治 (食料・環境領域主任研究官)
- 上林 篤幸 (食料・環境領域上席主任研究官)
- 吉田 行郷 (政策研究調整官)
- 宮原 浩一 (政策研究調査官)

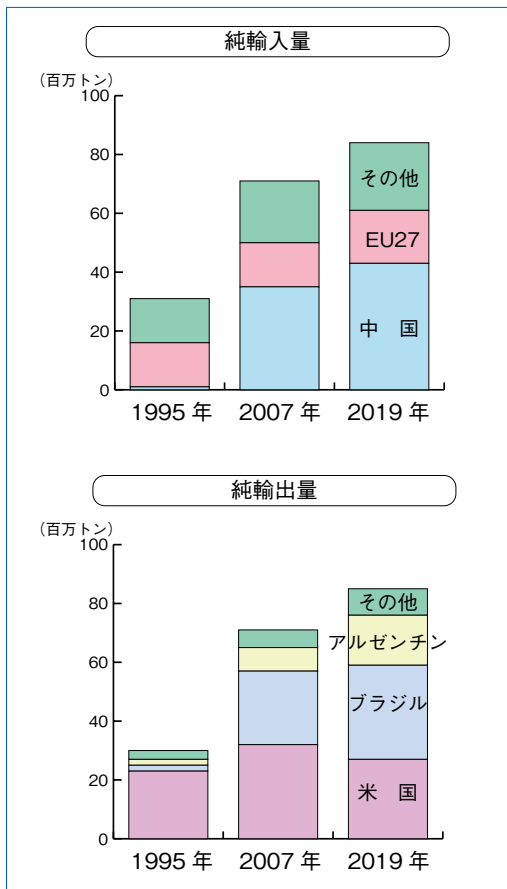


第2図 とうもろこしの純輸出量の主要国別シェア

注. 純輸出量合計は、31国・地域内の純輸出量の合計である。

及び大豆の価格は上昇傾向で推移し、2007年に比べ名目で31→46%、実質で6→17%上昇する見通しとなっています。また、肉類の消費量についても、各品目とも年間1人当たり消費量の伸びから増加し、価格も名目で41→42%、実質で7→12%上昇する見通しとなっています。

穀物需給を地域別にみると、各地域とも消費量、生産量ともに増加しますが、中でもアジア、アフリカ、中東で消費の伸びに生産量が追いつかず、純輸入量が拡大します。これに対し、欧



第3図 大豆の主要国別純輸入量及び純輸出量

州、オセアニアが純輸出量を拡大させ、食料の偏在化の傾向が拡大する見通しです。こうした中で、北米の純輸出量は引き続き減少し、中南米は純輸入地域から純輸出地域へ転換する見込みとなっています。

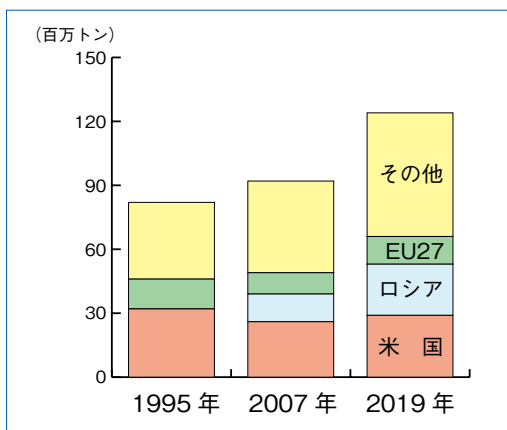
今回の見通しでは、品目別に主要国の動向を参考として紹介しています。とうもろこしでは、米国内のバイオエタノール需要の増加等により、米国の純輸出量が減少し、国際的には米国の純輸出量のシェアが5割を下回りま

す。大豆では、搾油用の需要の増加などから引き続き中国の純輸入量が増加し、そのシェアが5割を超えます。そして、米国の純輸出量が減るとうもろこし、大豆では、ブラジル、アルゼンチンなどの純輸出量の増加がその減少を賄うと予測されています。また、小

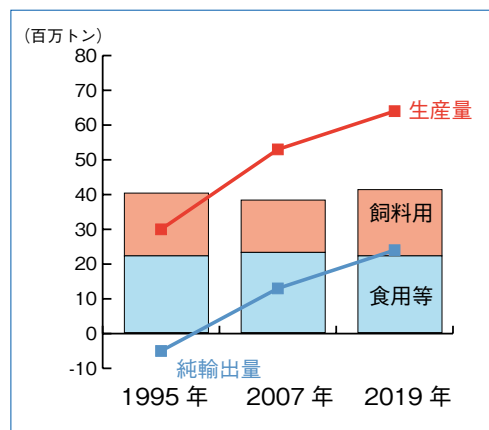
4 おわりに

以上、本年度の研究成果の概要について紹介しましたが、今後も基本的には、毎年、モデルの改良を行いながら、自然体の予測（いわゆる予測）を行っていく予定です。

麦や大麦、ライ麦等では、ロシアの生産量が大幅に増加し、輸出余力が拡大することから、ロシアの純輸出量のシェアは小麦で19%、その他の穀物で28%にまで拡大すると見込まれています。



第5図 小麦の主要国別輸出量等



第4図 ロシアの小麦需給の見通し